

区 潔萍 (オー ケッペイ)

中国出身

筑波大学 人間総合科学研究科障害科学専攻 博士課程

中国で調査をしていた時の思い出

偶然、去年12月頃、中国でデータ収集をしていたときのことを思い出した。調査先の小学校は、浙江省寧波市の都市近郊にある小学校で、2年連続でお世話になっていた。そのため、教員の先生方や、何人かの子どもたちの名前も顔も覚えているので、懐かしい感じがした。逆に、中高学年の子どもたちの中に、私のことを覚えていた子も驚くほどいた。

担当してくれた先生が個別式検査のために、ある会議室を控室として用意してくれた。集団式検査は各クラスで一斉に行うが、毎回検査が終わると、子どもたちが私の周りに集まり、「先生、また来てくれますか?」「このゲーム、また遊びたい。」と楽しそうに言う子もいれば、「なんでそんな変なテストをするの?」「難しすぎる」とか、不満げにいう子もいる。または、「先生、どこで仕事をしているの?」「先生とまた会いたい。オフィスに遊びにいったらいい?」と、すぐに親しくなる子もいた。話が盛り上がり過ぎると、次の授業に影響してしまうので、いつも慌てて申し訳ない気分で教室を出ていった。

調査開始から2、3日経って、ある3年生の男の子が私の居場所を発見した。その子のクラスの教室は、控室の同じフロアにあった。昼休みになると、時々控室のドアをノックして私がいるのかを確認しにきた。私がある部屋にいるとわかると、「先生、ここにいるんだ。」「先生、いつまでうちの学校にいるの?」と嬉しそうに尋ねてくる。私が冗談半分に「もう私に会いたくないでしょう。」というのと、その子は「違ふよ。先生が好きだから、会いたいよ。」と真顔

になって答えた。

全学年の調査を終えるまで、10日間を費やした。色々な予想外の出来事と戦いながら、無事に調査を終了すると、もう疲れ果ててしまった。修士の1年目から、あの都市と縁を結んで、この4年間、6回ぐらい往復した。当地の大学生がボランティアとして調査を協力してくれたおかげで、1週間で600人以上のデータを収集できた。研究データは収集から、入力、分析、そして結果を出すまでどのぐらいの時間と努力をかけるのか、この経験を通じて覚えた。だからこそ、自分が扱っている、一人ひとりの子どものデータはどれほど大事なのか、そのデータを如何に活かせるかに関して、大きな責任を感じている。博論を完成するのは、自分のためだけではなく、あの3年生の男の子のような多くの子どもたち、その小学校の先生方、そして私の調査のために協力してくれた方々のためでもある。

